母親が行う父親の育児関与への調整行動が ワーク・ファミリー・コンフリクトに及ぼす影響に関する質的研究

The effects of mother's coparental regulation on work-family conflict: A qualitative study

渡辺 瑞紀 (児童養護施設蒲生会大和荘)

Watanabe Mizuki (Children`s nursing home Gamoukai Yamatoso)

板倉 憲政 (岐阜大学教育学部)

Itakura Norimasa (Faculty of Education, Gifu University)

Abstract

近年，就労しながら家事や育児をする女性が多くなり，ワーク・ファミリー・コンフリクト (WFC) を抱える母親も増えた。渡辺・板倉 (2017) は，母親が行う父親の育児関与に対する促進行動と抑制行動，すなわち「調整行動」と母親の WFC の関連を調べ，「促進行動によって母親の WFC が高まり，抑制行動によって母親の WFC が低下する」という結果を得た。しかし，実際に，母親が調整行動をどのような場合に，どのような形で行い，それにより生じる結果をどうとらえているかは明確でない。本研究では，質的な検討を行い，母親の調整行動が母親の仕事と育児の両立にどう影響を与えるのかというプロセスに関する仮説モデルを生成することとした。M-GTA による分析の結果，調整行動のみならず，それに伴う父親の変化や反応を含む夫婦間の相互作用により，母親の WFC への影響も，ポジティブなものとネガティブなものに分かれることが示唆された。

Key words : 共働き，WFC，母親，父親の育児関与への調整行動

Ⅰ　問題と目的

近年の日本では，就労する女性の増加に伴い，共働き夫婦が多くなり，仕事をもちながら家事や出産・育児をする女性も増えてきた。仕事と家庭の調和をうまくできないときに生じる葛藤に関しては，近年，ワーク・ファミリー・コンフリクト (work-family conflict : 以下 WFC) の問題として取り上げられてきている。日本では，例えば渡井 (2007) によって，WFC は「仕事役割と家庭役割が相互にぶつかり合うことから発生する役割間葛藤」と定義されている。育児期の共働き父母を対象とした先行研究では，夫よりも妻において，家庭生活から仕事に対する葛藤が高いことや (松田, 2006 ; 富田・加藤・金井, 2006)，夫の家事・育児分担率が高いほど，妻の家庭生活から仕事に対しての葛藤が低下する傾向が明らかにされている (松田, 2006)。また，WFC への対処行動に着目した加藤・金井 (2006) では，女性において，WFC に対する夫婦間役割調整対処 (夫婦で互いの役割を調整することによって葛藤に対処する対処行動) により，精神的健康や結婚満足感にポジティブな影響が及ぼされていた。WFC の高い育児期の母親にとっては，特に子育てにおける父親からの協力や夫婦間の役割分担が，母親の負担の軽減に大きく関わってくると推測される。

一方，父親の子育てへの関与の程度には，母親側の要因も関係し，母親は父親の関与を妨げる行動をとる場合もある。近年，母親が父親の育児関与に采配をふるい，家庭役割に対する自分の責任を維持しようとするというゲートキーピングの存在が指摘されている。Van Egeren (2000) は，他方の親の子育て関与に対する抑制行動と促進行動を「調整行動」と称した。渡辺・板倉 (2017) は，母親の WFC と父親の育児関与の関連に着目し，母親が行う父親の育児関与に対する調整行動と WFC の関連について調べた。その際，母親が父親の育児関与を阻害すれば，母親の育児負担の増大，そして WFC の増大へとつながっていく可能性があると考え，「母親が父親の育児関与に対して行う抑制行動により母親の WFC が高まる」という仮説を立てて育児期の共働きの母親を対象に調査を実施した。しかし，結果として，仮説と異なり，「母親が父親の育児関与に対して行う促進行動によって母親の WFC の一部が高まり，抑制行動によって母親の WFC が低下する」ことが明らかになった。このことから，単に父親の育児関与を促進すれば母親の負担が減るという考え方では，共働き夫

婦の育児の実態を説明できないということが示された。

しかしながら，これまでの先行研究では，実際に母親が父親の育児関与やそれによって生じる結果を具体的にどうとらえているかについての十分な検討はなされていない。共働きの母親の立場に沿って，父親の育児関与に対する促進行動・抑制行動を，どのような場合に，どのような形で行い，それによって生じる結果をどのようにとらえているのかを明らかにすることは，促進行動・抑制行動についてそれぞれ肯定的側面・否定的側面を見つけ，共働きの父親と母親が育児において協働態勢をとることの意義をとらえ直すために有用であると思われる。

そこで本研究では，共働きの母親が調整行動をどのように行い，それによって生じる結果をどのようにとらえているのかを明らかにすることとし，そのためには，母親にインタビュー調査を行うことで当事者の体験を丁寧に分析することが必要であると考え，質的な検討を行うこととする。また，母親の子育てにおける父親との関係性は変化していく可能性があり，長期的な視点で考えると，促進行動・抑制行動や，それによって生じる結果は，時間の経過に伴い変化することも考えられる。過去と現在の調整行動やそれによって生じる結果を比較したり，さらに，現在の調整行動をとるようになったきっかけを母親がどうとらえているかを明らかにしたりすることも，母親が促進行動・抑制行動をとる意味により深く迫ることを可能にすると思われる。

以上を踏まえ，本研究では，共働きの母親の視点による分析を行い，母親が行う父親の育児関与に対する促進・抑制といった調整行動が，母親の仕事と育児の両立にどのように影響を与えるのかというプロセスに関する仮説モデルの生成を目的とする。

Ⅱ　方法

1. 調査協力者

就労し育児中の共働きの母親 14 名を対象に，2016 年 8 月～11 月にインタビュー調査を行った。調査協力者の平均年齢は 37.93 歳 (SD = 3.71) だった。また，調査協力者が第 1 子を出産後，仕事を始めた，もしくは仕事に復帰した当時の 1 日の勤務時間は平均 7.11 時間 (SD = 1.67)，1 週間の勤務日数は平均 4.79 日 (SD = 0.67) であり，現在の 1 日の勤務時間は平均 6.57 時間 (SD = 1.76)，1 週間の勤務日数は平均 4.93 日 (SD = 0.70) だった。子どもの数は平均 1.93 人 (SD = 0.46) だった。調査協力者の基礎データを Table1 に示す。

2. 調査手続き

調査者の知人，または調査協力者の知人を通して，共働きの母親に事前質問紙を配布し，インタビュー調査に協力できる場合に連絡先を記入してもらった。事前質問紙では，回答者の年齢，夫の年齢，同居している家族とその年齢，回答者の現在の就労形態・職種・1 日の勤務時間・1 週間の勤務日数，回答者が第 1 子を出産後に仕事を始めたもしくは仕事に復帰した時期，その当時の回答者の就労形態・職種・1 日の勤務時間・1 週間の勤務日数，その当時から現在に至るまでに回答者が休職していた期間や仕事の就労形態および職種が変わった時期，第 1 子が保育園もしくは幼稚園に通うようになった時期，夫の職業を尋ねた。協力の承諾を得た 14 名の母親と連絡をとり，調査の詳細を説明したうえで，調査日時・場所を決定した。

インタビュー調査は，半構造化面接において実施した。インタビュー時間は 40 分～1 時間程度であり，インタビューを行う前に，調査協力者に同意書を渡し，調査目的や質問内容の概要，インタビュー内容を IC レコーダーにより録音したい旨を説明し，インタビュー内容の記録は調査者が責任をもって管理・破棄すること，個人を特定する内容を除いたうえで論文に掲載することを合意のうえ，調査を実施した。

インタビューでは，あらかじめ用意した質問項目に則り，父親が子どもに関われるように母親が行う工夫，父親の子どもへの関わりが母親にとって納得できないときに行うこと，それらの結果父親の子どもへの関わりはどうなるか，父親の子どもへの関わりが母親の仕事と子育ての両立にどう影響しているかなどについて尋ねた。その際，過去と現在の調整行動やそれによって生じる結果を比較するために，母親が第 1 子を出産してから仕事を始めたり，仕事に復帰したりした当時と現在の 2 時点に関して質問を行った。また，現在の調整行動をとるようになったきっかけを母親がどうとらえているかについても尋ねた。必要に応じて質問の追加を行った。子育てに関する質問には，第 1 子の場合について答えてもらうこととした。

Table1　調査協力者の基礎データ

調査協力者	年代	職業	勤務時間		子の数	第1子の年齢		仕事開始・復帰時 ～ 現在までに休職や就労形態・職種の変更をしたか
			仕事開始・復帰時	現在		仕事開始・復帰時	現在	
NO. 1	30	公務員	1日8時間・週5日	1日4時間・週5日	2人	2歳	6歳	3年前 ～ 現在まで育児短時間勤務。
NO. 2	30	パート・アルバイト	1日5時間・週3日	1日5時間・週3日	2人	5歳	5歳	なし。
NO. 3	30	パート・アルバイト	1日8時間・週5日	1日5時間・週5日	3人	0歳	5歳	第2子，第3子の出産に伴い，産休・育休をとっていた期間 (2回) あり。現在は育児短時間勤務。
NO. 4	30	会社員	1日6時間・週5日	1日7時間・週5日	1人	1歳	3歳	第1子が3歳になるまで育児短時間勤務をとっていた。
NO. 5	30	公務員	1日6時間・週5日	1日6時間・週5日	2人	4歳	6歳	なし。現在は育児短時間勤務。
NO. 6	30	公務員	1日7時間・週5日	1日7時間・週5日	2人	5歳	5歳	なし。
NO. 7	40	会社員 ↓ パート・アルバイト	1日7.5時間・週5日	1日5時間・週4日	2人	1歳	3歳	第1子出産後は正社員だったが，第2子出産に伴い退職し，現在は新たな就業先でパートをしている。
NO. 8	30	会社員	1日6時間・週5日	1日6時間・週5日	2人	1歳	7歳	第2子の出産に伴い，産休・育休をとっていた期間あり。
NO. 9	30	会社員	1日7時間・週5日	1日6時間・週5日	2人	1歳	7歳	第2子の出産に伴い，産休・育休をとっていた期間あり。
NO. 10	30	パート・アルバイト	1日9時間・週6日	1日9時間・週6日	2人	0歳	5歳	第2子の出産に伴い，産休・育休をとっていた期間あり。
NO. 11	40	公務員	1日11時間・週5日	1日11時間・週5日	1人	2歳	7歳	なし。
NO. 12	40	会社員	1日8時間・週5日	1日8時間・週5日	2人	1歳	8歳	第2子の出産に伴い，産休・育休をとっていた期間あり。
NO. 13	30	パート・アルバイト (就業先の変更あり)	1日7時間・週4日	1日6時間・週5日	2人	3歳	7歳	第2子出産に伴い退職し，半年前から新たな就業先で勤務を始めた。
NO. 14	40	自営業	1日4時間・週4日	1日7時間・週6日	2人	0歳	7歳	第1子出産後に自営業を始めた。第2子の出産に伴い，休職していた期間あり。

3. 分析手続き

分析方法は，木下 (2007) の M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を採用した。この方法は，研究対象の体験を語りから統合的にその特性を明らかにしていく方法であり，手続きが明確で，プロセス的・体系的特性をもっている研究対象に適しているとされる (角南, 2013)。そこで，この方法は，共働きの母親の視点から，母親が行う調整行動が，母親の仕事と育児の両立にどのように影響を与えるのかというプロセスに関する仮説モデルを生成するという本研究の目的に適していると判断した。

分析の手順としては，母親から語られた全ての内容を逐語化し，「母親が行う父親の育児関与に対する促進・抑制といった調整行動が，母親の仕事と育児の両立にどのように影響を与えるのか」というリサーチ・クエスチョンに基づき，データを分析していった。逐語データを意味のまとまりで区切り，意味内容ごとにデータを抽出し，概念化した。類似例と対極例の両方向から継続的比較分析を続け，概念を生成しながら，新たに加えたデータと比較して概念を洗練していった (オープン・コーディング)。同時進行で，生成した概念と他の概念との関係を個別に比較し，概念をまとめていくという，カテゴリー生成の作業を行った (選択的コーディング)。生成したカテゴリー間の関係は，図に表し，結果図を作成した。心理学を専攻する大学生・大学院生と大学教員を交えながら，概念の修正や統合，カテゴリー生成，結果図の作成に関す

る検討を行い，最終的な理論的飽和化を確認した。

Ⅲ　結果

1. 概念の生成・カテゴリー化と結果図

分析の結果, 35 の概念と 8 つのカテゴリー, 6 つのサブカテゴリーが生成された。35 概念については, Table2 に示した。カテゴリー間の関係は図に表し，結果図を作成した (Figure1)。文中においては，概念名は【　】，カテゴリー名は≪　≫，サブカテゴリー名は＜　＞で表す。

Table2　生成された概念一覧

概念名	定義
1 家族そろって過ごす時間を作る	母親，父親，子どもがそろって過ごせるような時間を作るために，努力や工夫をする。
2 父親以外の家族からのサポート	父親以外の家族から，家庭生活や育児においてサポートを受けている。
3 子どもの成長に伴い，求められる育児行動が変化	子どもの成長に合わせ，親がどのように子どもと関わればよいかも変化していく。
4 仕事に奪われる家事・育児時間	仕事の忙しさにより，時間を奪われ，母親が家事を行う時間や子どもと関わる時間を十分にもてない。
5 父親が自主的に動く	父親が自主的に家事・育児をしたり，母親をサポートしたりする。
6 父親の大変さの理解による母親の思いの諦め	本当は父親にしてほしいことがあっても，父親の仕事の大変さを理解し，諦める。
7 父親の家事・育児行動の足りなさへの不満	父親が家事・育児を十分に行わなかったり，協力的でなかったりし，母親が不満を抱く。
8 母親が仕事を満足にできない	育児のため，母親が仕事時間を削ることになり，仕事を満足に行えなくなっている。
9 父親の育児関与の機会を母親が作る	母親が，育児の中で父親の役割を作ったり，父親が子どもと関わることのできる機会を設けたりする。
10 父親が受けとめてくれる	母親が伝えたことを父親が聞いて，受けとめてくれる。
11 子どもとの関わりを通し父親に生じるポジティブな感情	子どもと関わる中で，父親が楽しさや嬉しさなどポジティブな感情を抱く。
12 父親だからこそできる子どもとの関わり	母親よりも父親の方が適している部分を生かした子どもとの関わり。
13 父親と子どもの関わりに対する母親の喜び	父親が子どもと関わる様子を見て，母親が喜びを感じる。
14 子どもに父親のことも好きになってほしい	父親よりも母親を好きな子どもに，父親のことも好きになってほしいという思いを母親がもっている。
15 母親の家事・育児負担の軽減	父親の家事・育児への協力により，母親の負担が軽減する。
16 父親に不満を伝える	母親が父親に対して不満に思ったことを伝える。
17 父親の行動の改善のされなさ	父親の行動について母親が不満を伝えても，なかなか改善されない。
18 父親の育児行動の内容への不満	父親が子どもに対してとる行動について，母親が不満を抱く。
19 仕事が気分転換になる	母親が育児をする中で，仕事が気分転換の場となっている。
20 子どもへの影響への不安	父親が子どもに対してとる行動が，子どもに悪影響を及ぼすのではないかと，母親が不安に感じている。
21 父親が子どもと関われる時間の少なさ	父親が仕事で忙しく，子どもと関われる時間が少ない。
22 父親と子どもだけの時間を作る	父親と子どもだけで過ごせるような時間を母親が作る。
23 父親に頼む	母親が父親に家事・育児をするように頼む。
24 母親の仕事へのポジティブな影響	父親の協力により，母親の仕事にポジティブな影響がもたらされる。
25 父親の性格の理解による母親の思いの諦め	本当は父親にしてほしいことがあっても，父親の性格を理解し，諦める。
26 父親が母親の大変さを理解	母親の家事・育児の大変さを父親が理解してくれている。
27 子どもへの申し訳なさ	母親が仕事で忙しく，子どもに会えない時間が長いことについて，申し訳なく思っている。
28 母親の余裕のなさ	仕事と育児をする中で，母親の生活に余裕がない。
29 職場からの理解	母親の育児について，職場からの理解を得られている。
30 子どもに対し，夫婦の一方とは異なる行動をもう一方がとる	子どもに対し，夫婦の一方が何か行動をとったとき，もう一方はそれとは異なる行動をとる。
31 母親の精神的負担の軽減	父親のサポートにより，母親の精神的な負担が軽減する。
32 仕事復帰前の不安	母親が育児休暇から仕事に復帰する前に，不安な感情を抱いていた。
33 夫婦で子どもの様子を共有	会話などにより，夫婦間で子どもの様子を共有する。
34 父親が転職・退職	育児時間の確保のため，父親が転職・退職する。
35 父親と子どもの関わりを見て気づかされる	母親が父親の子どもとの関わりから気づきを得たり，学んだりする。

2. プロセス全体の動き

育児期の共働きの母親は，出産後，不安や余裕のなさを抱えながら≪仕事開始≫する。その状況の中，母親が一人で家庭役割を担うのではなく，≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫が生じる場合もある一方で，≪母親が父親への思いを抱え込む≫ようになってしまう場合もある。もしくは，母親がはたらきかけなくても，自主的な≪父親の動き≫がみられる場合や，夫婦の協働以外の部分で≪母親の仕事と育児の両立を支える他の要因≫が存在する場合もある。父親に頼れず，≪母親が父親への思いを抱え込む≫とき，この≪母親の仕事と育児の両立を支える他の要因≫により母親の生活が支えられることもある。

≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫が生じると，≪夫婦の動きの変化≫が起こる。父親の特性を生かした子どもとの関わりがなされたり，父親が母親の思いを受けとめたりする場合は，≪父親の家事・育児関与により生じるポジティブな影響≫へとつながる。また，母親のはたらきかけによる夫婦の動きの変化のみならず，自主的な≪父親の動き≫も≪父親の家事・育児関与により生じるポジティブな影響≫につながる。

一方で，母親のはたらきかけによっても父親の行動が改善されない場合もある。この場合，母親が父親にはたらきかけなくなり，結果的に≪母親が父親への思いを抱え込む≫状況に陥ることもある。父親に頼れなくなると，母親の家事・育児負担は増え，≪母親の仕事と育児の両立が困難な状況≫が生じる。

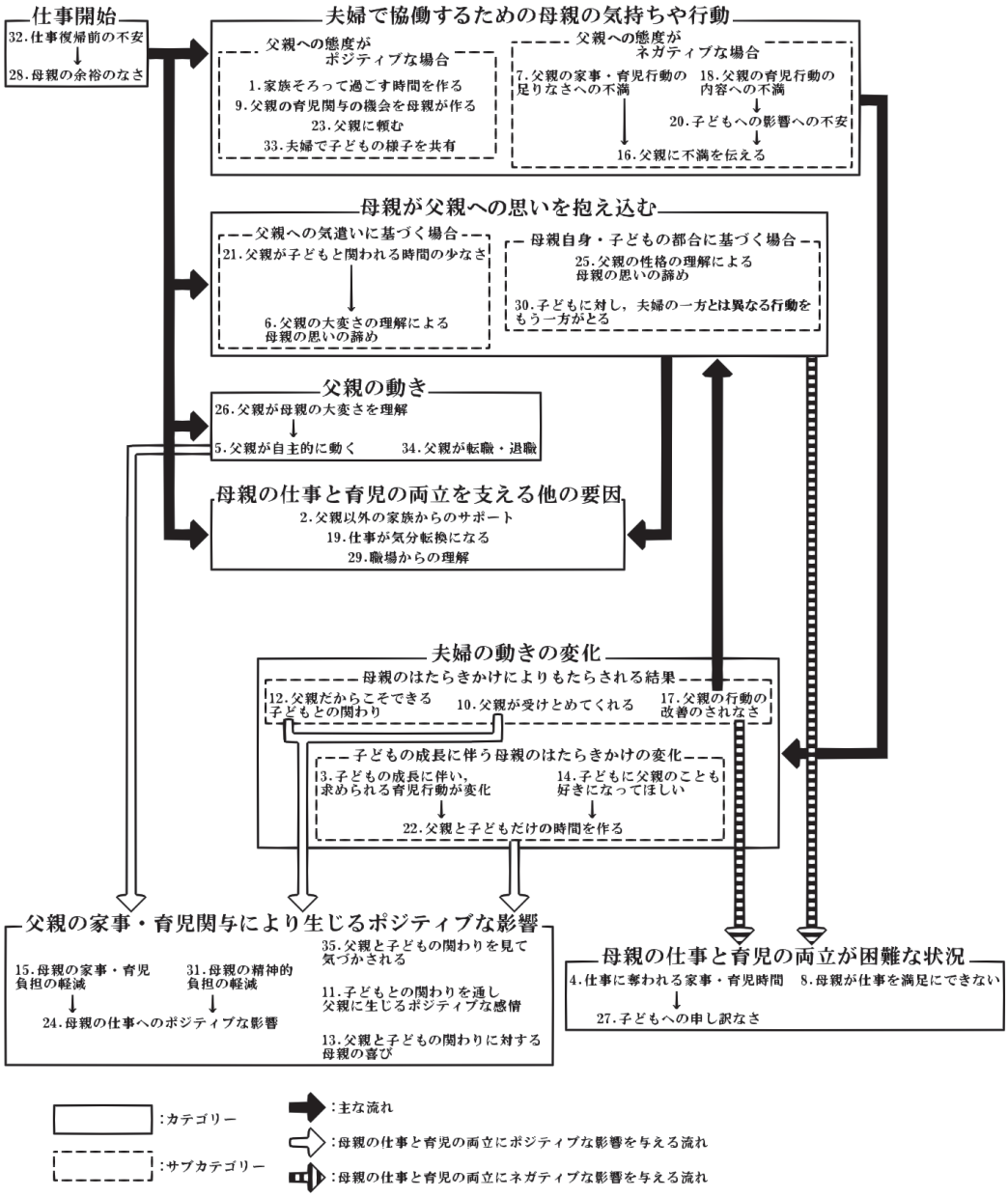

Figure1　結果図

3. カテゴリーごとの説明

・カテゴリー1：≪仕事開始≫

出産後，仕事に復帰したり，新たに仕事に就いたりする際，母親は，「復帰するので何が心配かって，朝 (子どもを保育園に連れて行くまでの時間) と帰り (帰ってきてから子どもを寝かすまでの時間) がすごい心配だったんです (NO. 6) 」など，【仕事復帰前の不安】を抱えていた。また，仕事にも育児にも目が向き，「仕事してきて，帰ってきて，分単位で家事をしなきゃいけないし，子どもを早くお風呂に入れなきゃいけない (NO. 4) 」など，生活に【余裕のなさ】を感じていた母親も多い。

・カテゴリー2：≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫

母親が一人で家庭役割を担うのではなく，≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫が生じる場合もみられた。「休みの日で (父親と) 一緒にいられるときは，一緒に出かける (NO. 1) 」など，【家族そろって過ごす時間を作る】ようにしたり，「パパと (子どもが) 一緒に遊べるような道具を (母親が) 用意して，パパが時間があるときにやれるようにしてます (NO. 1) 」など，【父親の育児関与の機会を母親が作る】ようにしたり，「洗濯ぐらい干してくれる？って (父親に) 言ったり (NO. 3) 」など，家事・育児を【父親に頼む】ようにしたり，「ビデオカメラとか写真とか，自分がいない間にあ

ったことは，なるべく記録してもらったりとか，今日はどうだったかみたいな話はいつもしてもらうようにしてました (NO. 10) 」など，【夫婦で子どもの様子を共有】するようにしたりしている母親もいた。

以上のように，＜父親への態度がポジティブな場合＞もあったが，反対に，＜父親への態度がネガティブな場合＞も存在した。例えば，「家事全てを (母親に) 任せて，のんびりされているように思う (NO. 11) 」，「 (父親が子どもに) 結構感情的に怒っちゃう (NO. 9) 」など，母親が【父親の家事・育児行動の足りなさへの不満】や【父親の育児行動の内容への不満】を感じる場合もみられた。そして，【父親の育児行動の内容への不満】を感じた場合には，「 (父親が) こんなふうに怒っちゃって子どもに悪影響じゃないかな (NO. 9) 」など，【子どもへの影響への不安】を伴うことが多かった。これらのように母親が父親への不満を感じた際には，「その (子どもへの) 怒り方ひどいんじゃない？とかって言っちゃう (NO. 9) 」など，【父親に不満を伝える】というはたらきかけに発展する場合が多くみられた。

・カテゴリー3：≪母親が父親への思いを抱え込む≫

≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫が生じる場合とは反対に，≪母親が父親への思いを抱え込む≫場合もみられた。「子どもは寝てるから (父親を) 見れなくて，旦那も (子どもが) 寝てる顔しか見れなくて (NO. 3) 」など，【父親が子どもと関われる時間が少ない】とき，母親には，「まあ，(父親が) もっといろいろやってくれたらいいのになぁとは思うけど，忙しいから仕方がないのかな (NO. 1) 」など，父親の大変さを考慮し，父親にしてほしいことがあっても諦めるという，【父親の大変さの理解による母親の思いの諦め】が生じることもあった。そのように＜父親への気遣いに基づく場合＞もあれば，＜母親自身・子どもの都合に基づく＞ことで父親への思いを抱え込む場合も存在した。例えば，「 (父親の子どもへの怒り方について母親が注意すると) 余計悪化するっていうか，子どもの前で私が主人をそうやって言うと，僕が子どもに対して怒ってるのに君がそうやって言ったら僕が悪者じゃないか，みたいな感じで言うから，なるべくその場ではもうほっといて，私からは言わないようにしようとしてる (NO. 9) 」など，母親が父親にしてほしいことがあっても，父親の性格を考慮し，思いを伝えても無意味，あるいは伝えることで母親自身や子どもにも新たな負担が発生すると想定し，伝えるのを諦めるという，【父親の性格の理解による母親の思いの諦め】が生じることもあった。それに加え，父親の行動が母親の意に沿わないときに，「私は (父親と) 一緒になって (子どもを) せかすと，2 人からわーっと言われちゃうとあれやで，私は言わないようにっていう感じですかね (NO. 6) 」など，父親に思いを伝えるのではなく，【子どもに対し，夫婦の一方とは異なる行動をもう一方がとる】ことで子どもを守ろうとする場合もあった。

・カテゴリー4：≪父親の動き≫

母親のはたらきかけによらない自主的な≪父親の動き≫もみられた。「私が何か言うっていうよりも前に，大変さはわかってくれて，手伝ってくれた (NO. 4) 」など，【父親が母親の大変さを理解】することで，【自主的に動く】。また，父親が「 (家に早く帰ることのできる仕事に) 転職」してくれた (NO. 8) など，育児時間の確保のために【父親が転職・退職】する場合もあった。

・カテゴリー5：≪母親の仕事と育児の両立を支える他の要因≫

夫婦の協働以外の部分での≪母親の仕事と育児の両立を支える他の要因≫には，主に 3 つのものが挙げられた。1 つ目は，「実家があるから，仕事と子育てが両立できてると思ってます (NO. 4) 」など，【父親以外の家族からのサポート】が得られること，2 つ目は，「 (仕事に行くと) 気持ちが切り替えられる (NO. 9) 」など，母親が育児をする中で【仕事が気分転換になる】こと，3 つ目は，「 (仕事のフォローを) お互い様みたいな感じでやってくれる人ばっかだから (NO. 4) 」など，母親の育児について【職場からの理解】が得られていることである。母親が父親に頼れず，≪父親への思いを抱え込む≫状況にあるときにも，「まあ (父親も) 普通に会社員なので，頼れる限界があって，向こうは向こうで忙しい時期だったりすると，私がやってるのは全部，実家を頼ってるので (NO. 4) 」など，父親との協働以外の要因を支えとすることもあった。

・カテゴリー6：≪夫婦の動きの変化≫

≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫により，≪夫婦の動きの変化≫が起こる。＜母親のはたらきかけによりもたらされる結果＞としては，「私にはできないような，アクロバティックな，体を使った遊びをしてくれるので，それはパパならではかな (NO. 13) 」など，父親の性格や特技を生かした【父親だからこそできる子どもとの関わり】がなされる場合や，「具体的にこうしてほしいって言えば，自分の言うことは一応聞いてはくれる (NO. 1) 」など，母親の伝えたことを【父親が受けとめてくれる】場合もあったが，一方で，「言ったときは直すけど，また同じことが繰り返される (NO. 2) 」など，【父親の行動が改善されない】場合もあった。この場合，結果的に≪父親への思いを抱え込む≫状況に陥る母親もいた。

他に，＜子どもの成長に伴う母親のはたらきかけの変化＞もみられた。「ちっちゃいうちはママの方がいいんだけど，ある程度大きくなると，外に遊びに行ったり，いろんなもの体験したりするのって，パパの方がいいと私は思ってるから，そういうのを考えて，パパと 2 人で出かけるようにした (NO. 2) 」など，【子どもの成長に伴い，求められる育児行動が変化】することで，父親の役割が重要となったことや，「小さいときはパパがだっこしても喜ばなかったりとか，私と手をつなぎたいって言うから，パパのことも好きになってくれるといいなぁっていうか，パパも疎外感がなく一緒にできるといいかなぁっていうふうだったので (父親と子どもが一緒に遊べるようにした) (NO. 1) 」など，母親が【子どもに父親のことも好きになってほしい】と思ったことをきっかけに，【父親と子どもだけの時間を作る】はたらきかけが行われた。

・カテゴリー7：≪父親の家事・育児関与により生じるポジティブな影響≫

カテゴリー1～6 の説明で述べた中で，父親が家事・育児に関与している，もしくは関与するようになったのは，【父親だからこそできる子どもとの関わり】がなされるようになった場合や，母親の伝えたことを【父親が受けとめてくれる】ことで家事・育児に関与するようになった場合，＜子どもの成長に伴う母親のはたらきかけの変化＞により父親が子どもと関わる時間が作られた場合，そして，母親のはたらきかけによらない自主的な≪父親の動き≫により家事・育児に関与する場合である。これらにより様々な≪ポジティブな影響≫が生じる。まず，父親の協力により，【母親の家事・育児負担が軽減】したり，「やっぱり精神的に，(父親に) 1 週間に 1 回でも早く帰ってきてもらえると，一人で子どもを見るのと 2 人で子どもを見るのでは全然違います (NO. 5) 」など，【母親の精神的負担が軽減】したりする場合が多かった。そして，負担が軽減することで，「子どもを見てくれるから，仕事を頑張れる気になれてるっていうのはすごくあります (NO. 8) 」など，【母親の仕事へのポジティブな影響】が生じる場合もあった。さらに，「自分が真面目になりすぎちゃうところを，ちょっと力を抜かせてくれるような。もうちょっと面白くやればいいんじゃない？っていう気づきにいつもなったかなぁって (NO. 8) 」など，母親が【父親と子どもの関わりを見て気づかされる】ことや，「たまにしかパパとは遊べないから，(子どもが) 喜んでるのを見て，パパも嬉しいって思うみたいで (NO. 2) 」など，【子どもとの関わりを通し父親にポジティブな感情が生じる】こと，「いつもはお母さんだけど，お父さんと関われてよかったねとは思う (NO. 3) 」など，【父親と子どもの関わりに対して母親が喜びを感じる】こともあった。

・カテゴリー8：≪母親の仕事と育児の両立が困難な状況≫

母親が【父親の行動の改善のされなさ】に悩まされたり，父親に頼れず≪父親への思いを抱え込む≫ようになったりすると，母親がすべきことは増え，家事・育児負担も大きくなる。そうした状況で，「今までのんびり家のことも子育てもやってたのが，お仕事に時間とられて，少ししかなくなっちゃったから，子どもの話も聞きながら，ご飯も作り，お風呂に入れたりとか…時間に追われてる (NO. 2) 」など，【仕事に家事・育児時間を奪われる】ことや，中には，「子どもを迎えに保育園に行くと，いつも最後に残ってるっていう感じでしたし，子どもには申し訳ないなぁっていう思いもあった (NO. 11) 」など，【仕事に家事・育児時間を奪われる】ことで【子どもへの申し訳なさ】を感じる母親もいた。また，母親が育児のために【仕事を満足にできない】と感じることもあった。以上のように，母親の家事・育児負担が多くなると，≪母親の仕事と育児の両立が困難な状況≫が生じる。

Ⅳ　考察

1. 本研究の結果における母親の調整行動のとらえ方

本研究では，母親の調整行動を，「促進行動」と「抑制行動」ではなく，「家事・育児を父親とともに行おうとする際に生じる母親の気持ちやはたらきかけ」を表す≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫と，「母親が父親と協働しようとせず，父親への思いを表出しない」という≪母親が父親への思いを抱え込む≫ことの 2 側面からとらえることができると考えられる。Van Egeren (2000) による Parenting Regulation Inventory (PRI) や，それを基にした加藤・黒澤・神谷 (2014) の夫婦ペアレンティング調整尺度では，促進行動の項目は，母親が父親に対して肯定的な態度をとり，父親の育児行動を励ますもののみだったが，≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫は，＜父親への態度がポジティブな場合＞と＜ネガティブな場合＞の 2 つに分かれた。＜ネガティブな場合＞は，【父親に不満を伝える】など，父親に対し批判的ではあるが，父親の家事・育児関与の促進や，育児行動の内容の改善のために行われるものが多く，父親との協働を目指す中で生じてくるものだった。また，PRI や夫婦ペアレンティング調整尺度では，抑制行動の項目は，母親が父親の育児行動を批判し，父親を子どもから遠ざけようとする内容であり，今回の結果では，そのような内容をはっきり示すものはみられなかった。しかし，≪母親が父親への思いを抱え込む≫ことは，母親が父親と協働しようとしなくなっている点では，抑制行動と共通する部分もある。

2. 母親の調整行動が母親の仕事と育児の両立に与える影響

結果図では，≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫の結果として，【父親だからこそできる子どもとの関わり】がなされる場合や，母親の伝えたことを【父親が受けとめてくれる】場合に，母親の仕事と育児の両立において様々な≪ポジティブな影響≫がもたらされ，反対に，【父親の行動が改善されない】場合は，≪母親の仕事と育児の両立が困難な状況≫に陥ることを示した。これらのことから，母親が夫婦での協働を目指す調整行動をとっても，それにより生じる父親の変化や反応に応じて，母親の仕事と育児の両立への影響も，ポジティブなものとネガティブなものに分かれていく可能性が示された。Marin, Holtzman, DeLongis, & Robinson (2007) は，障害をもつ子どもを育てる親世代において，配偶者の反応がポジティブな場合に，不適応的なコーピングの悪影響が弱まることを報告し，コーピングそれ自体の種類や量ばかりではなく，それが配偶者からどう取り扱われるかにより，有効性が異なることを示した。今回の結果でも，母親の調整行動それ自体ではなく，それが父親からどう取り扱われるかによって，母親の仕事と育児の両立への影響が左右されており，配偶者の反応の重要性が示された。

また，今回，父親が育児に関与するからこそ生じる【父親の育児行動の内容への不満】もみられ，父親が育児に関与しても，育児行動が母親の意に沿わない場合もあるとわかった。しかし，その場合も，母親が【父親に不満を伝える】ことができ，それを【父親が受けとめてくれる】のならば，母親の仕事と育児の両立にも≪ポジティブな影響≫がもたらされる可能性が示された。夫婦間では，否定的な感情を生じさせるような状況が発生したとしても，そこで建設的なコミュニケーションがなされれば，関係をより深めることも可能となる (岩藤, 2008)。このことから，父親への不満が生じても，それを父親に伝え，話し合うことで，結果的に夫婦の協働を高められ，母親の WFC も高まりにくくなる可能性が考えられる。一方，母親が【父親に不満を伝え】ても，【父親の行動が改善されない】場合は，≪母親が父親への思いを抱え込む≫ようになり，≪母親の仕事と育児の両立が困難な状況≫に陥る可能性が示された。Christensen & Shenk (1991) は，どちらか一方の要求に対し他方が話し合いを避けようとする夫婦間コミュニケーションの様式を，「要求—回避型コミュニケーション」として示している。これは，母親が要求として【父親に不満を伝える】ようにしても，父親にそれを回避され【父親の行動が改善されない】状況にも当てはめられると考えられる。このコミュニケーションの様式は，時の経過とともに関係の崩壊へとつながることが見出されており (Gottman & Krokoff, 1989)，今回の結果でも，関係の崩壊とまではいかなくても，≪母親が父親への思いを抱え込む≫ようになる場合があることが示された。そして，その場合，母親の WFC が高まると考えられる。

さらに，母親の調整行動に伴う父親の変化や反応として生じるものには，【父親だからこそできる子どもとの関わり】もあり，これは母親の仕事と育児の両立にも≪ポジティブな影響≫をもたらした。Jia & Schoppe-Sullivan (2011) では，父親が「遊び活動」の領域で育児に参加した場合には，支持的なコペアレンティングが増加していたが，父親が「世話活動」の領域で育児に参加した場合には，阻害的なコペアレンティングが増加していた。これは，父親がどの領域で育児に参加するかにより，母親の調整行動が変わることを示している。このことから，育児の中で，母親が適している領域では母親が，父親が適している領域では父親が関与する方が，協働しやすくなる可能性が考えられる。

3. 母親の調整行動の変化

今回，調整行動は，時間の経過とともに変化する場合もあることが明らかになった。まず，≪夫婦で協働するための母親の気持ちや行動≫が生じても，【父親の行動が改善されない】場合，母親の行動が変化し，≪父親への思いを抱え込む≫ようになる。これまでの研究では，抑制行動が行われる背景にどのような要因が存在するのかについては十分に検討されてこなかったが，今回，抑制行動の内容をはっきり示す概念やカテゴリーは生成されなかったものの，母親が父親と協働しようとしなくなるプロセスの存在が示された。

また，子どもの成長によっても調整行動は変化した。育児において，最初は母親にしかできないことが多く，母親が中心となりがちでも，子どもの発達に伴い，父親が関与すべき機会も増えていき，母親により父親の関与が促進され，調整行動にも変化が生じることが考えられる。

4. 本研究のまとめと課題

本研究の結果から，調整行動が母親の WFC に直接影響を与えるのではなく，調整行動に伴う父親の変化や反応により，母親の仕事と育児の両立への影響が左右される可能性が示された。そして，母親により夫婦での協働を目指す調整行動が行われても，夫婦間の相互作用の中で，調整行動が変化し，父親と協働しようとしなくなってしまう動きがみられる場合もあることが明らかになった。本研究の結果には，夫婦の認識の一致性など，夫婦関係が絡んでいる可能性が考えられるため，今後はそうした視点からの検討も必要となるだろう。また，今後も調査協力者の条件をできる限り統制してデータ

を集めていく必要がある。

引用文献

Christensen, A., & Shenk, J. L. (1991). Communication, conflict, and psychological distance in nondistressed, clinic, and divorcing couples. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *59*, 458-463.

Gottman, J. M., & Krokoff, L. J. (1989). Marital interaction and satisfaction: A longitudinal view. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *57*, 47-52.

岩藤 裕美 (2008). 葛藤生起場面における夫婦間コミュニケーション・スタイル：尺度の作成と妥当性の検討 人間文化創成科学論叢, *11*, 183-193.

Jia, R., & Schoppe-Sullivan, S. J. (2011). Relations between coparenting and father involvement in families with preschool-age children. *Developmental Psychology*, *47*, 106-118.

加藤 道代・黒澤 泰・神谷 哲司 (2014). 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討 心理学研究, *84*, 566-575.

加藤 容子・金井 篤子 (2006). 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果　心理学研究, *76*, 511-518.

木下 康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA——実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて——弘文堂

Marin, T. J., Holtzman, S., DeLongis, A., & Robinson, L. (2007). Coping and the response of others. *Journal of Social and Personal Relationships*, *24*, 951-969.

松田 茂樹 (2006). 仕事と家庭生活の両立を支える条件　ライフデザインレポート, *1-2*, 4-15.

角南 なおみ (2013). 子どもに肯定的変化を促す教師の関わりの特徴——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成—— 教育心理学研究, *61*, 323-339.

富田 真紀子・加藤 容子・金井 篤子 (2006). ワーク・ファミリー・コンフリクトプロセスにおける性役割観とジェンダー・タイプの影響　経営行動科学学会第 9 回年次大会発表論文集, 334-337.

Van Egeren, L. A. (2000). *The parental regulation inventory*. Unpublished manuscript. Michigan State University, Michigan.

渡井 いずみ (2007). ワーク・ライフ・バランスとワーク・ファミリー・コンフリクト (特集 多様化する労働形態とワーク・ライフ・バランス) ストレス科学, *22*, 164-171.

渡辺 瑞紀・板倉 憲政 (2017). 母親が行う父親の育児関与への調整行動とワーク・ファミリー・コンフリクトとの関連——母親の育児不安を背景として—— 心理臨床学研究, *35*, 72-77.